

# 当院における大腿骨近位部骨折術後長期入院例の検討

札幌徳洲会病院 整形外科外傷部 辻 英 樹 森 利 光  
磯 貝 哲 倉 田 佳 明  
橋 本 功 二 佐々木 友 基  
井 畑 朝 紀 谷 平 有 子  
札幌東徳洲会病院 外傷部 土 田 芳 彦 村 上 裕 子  
田 邊 康 新 井 学

Key words : Proximal femoral fracture (大腿骨近位部骨折)

Long hospital stay (長期入院)

Acute care hospital (急性期病院)

要旨：当院で手術を行った大腿骨近位部骨折術後長期入院例について調査検討した。対象は60歳以上の大腿骨近位部骨折患者311例（男73，女238）で，平均年齢は82.0歳であった。手術は原則，来院24時間以内に施行し，術翌日より荷重歩行訓練を開始した。平均入院日数は23.1日であった。入院日数を30日を境に長期入院群，短期入院群に分けて当院への来院形式を調査し両群間で比較検討した。また長期入院例について，その要因と認知症の有無との関連を調査検討した。また術後合併症の内容と患者の転帰を調査した。以上の調査検討により①長期入院例は自宅から来院の割合が高い，②長期入院で自宅退院となった症例では認知症患者は少ない，③長期入院で他施設・病院への入所・転院となった患者は認知症患者が多い，④合併症のために長期入院となると自宅退院は難しくなる，の4点が明らかとなった。大腿骨近位部骨折の治療において急性期病院の使命を果たすためには，リハビリ病院との綿密かつ迅速な連携，全身管理を適切に行える医師との連携，患者家族に対して適切な病状説明が重要かつ不可欠である。

## はじめに

大腿骨近位部骨折は近年増加傾向にあり，今後も老年人口の増加に伴い発生数は2043年まで増加し続けると推計されている<sup>2)</sup>。治療では早期手術・早期リハビリテーションが，生命そして機能的予後にも好影響を与えるとされる<sup>1,3)</sup>。当院は急性期病院であり，早期手術・早期リハビリを実践し，スムーズにリハビリ病院での加療に移行できるよう努めてきた。しかし殆どの症例は内科的合併症や認知症を有しており，また家族の受け入れなどの問題で早期退院ができないことがある。今回当院で手術を行った大腿骨近位部骨折術後長期入院例について調査検討した。

## 対 象

対象は2007年4月から2008年12月まで，札幌徳洲会病院で手術を行った60歳以上の大腿骨近位部骨折患者311例（男73，女238）で，平均年齢は82.0歳（60-103歳）であった。骨折型は転子部・転子下骨折：161例，頸部骨折：150例であった。手術は原則来院24時間以内に施行した。手術の内訳は骨接合術227例（ハンソンピン：68例， $\gamma$ -3 nail，PFNAなど：159例），人工骨頭置換術84例であり，原則術翌日より荷重歩行訓練を開始した。当院平均入院日数は23.1日（2-243日）であった。

## 調査・検討方法

以上の症例について、入院日数が31日以上であった症例を長期入院群、30日以内であった症例を短期入院群とし、当院への来院形式を調査し両群間で比較検討した。また長期入院例について、長期となった要因を調査し、認知症の有無との関連を検討した。また術後合併症が要因となった症例について、その内容と転帰を調査した。

## 結 果

長期入院群は114/311例（37%）、短期入院群は197/311例（63%）であった。長期入院群では、自宅より救急車などで来院した症例は93/114例（82%）、施設・病院などから紹介された症例が21/114例（18%）であった。一方、短期入院群は自宅より救急車などで来院した症例は124/197例（63%）、施設・病院などから紹介された症例は73/197例（37%）であった（図-1）。

長期入院となった要因として、①自宅退院まで当院でリハビリを完遂した：40例、②他施設・病院へ入所・転院までの待機：47例、③術後合併症による：42例（以上重複あり）に大別された。認知症を有する患者は①では4/40例（10%）で、②では28/47例（60%）であった。

長期入院の要因になっていた術後合併症は、呼吸、循環、消化器系など多岐に渡っており（表1）、これらの患者の転帰は自宅退院9/42

例（21%）、他施設・病院へ入所・転院28/42例（67%）、死亡5/42例（12%）であった（図-2）。

表1 長期入院の要因となった術後合併症（42例）の内容（重複あり）

・消化器系	
消化管出血	2例
胃潰瘍・食欲不振	5例
腸閉塞	1例
偽膜性腸炎	1例
・循環器系	
DVT・肺塞栓	5例
急性心筋梗塞	1例
腎不全の増悪 （血液透析含む）	7例
心不全	3例
脳梗塞	2例
・呼吸器系	
急性肺炎	5例
COPDの悪化	2例
・その他の全身合併症	
糖尿病悪化	3例
尿路感染	2例
肝性脳症	1例
褥創	2例
精神疾患	2例
・手術合併症	
表層感染	4例
深部感染	1例
骨折の転位	2例
人工骨頭脱臼	2例

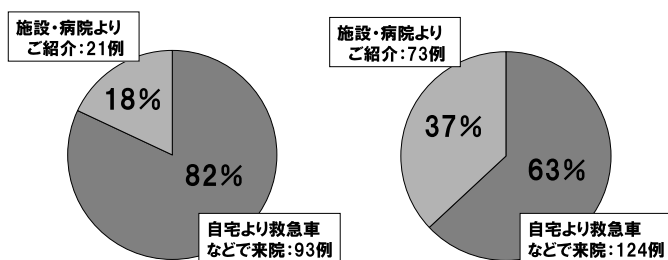


図-1 対象症例の当院来院形式

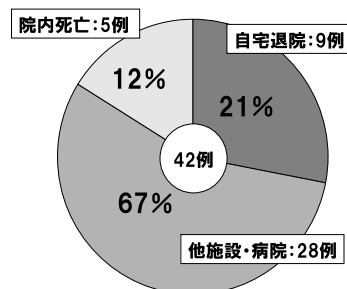


図-2 術後合併症により長期入院となった患者の転帰

## 考 察

当院における大腿骨近位部骨折術後長期入院例について調査検討を行った。それにより以下の4点が明らかとなった。①長期入院の症例では、自宅から来院の割合が高い、②当院でリハビリを完遂し、自宅退院となった症例では認知症患者は少ない、③他施設・病院への入所・転院を待機している症例では認知症患者が多い、④合併症のために長期入院となると自宅退院は難しくなる。

近年の病院機能分化の傾向は著しい。大腿骨近位部骨折の治療においても周術期治療を行う急性期病院とリハビリ病棟の機能分化が進んでおり、患者はその状態に応じて適切な医療機関で治療を受けるのが理想的である。急性期病院としての使命は、患者の全身状態、歩行生活能力、社会的背景を適切に把握し、早期手術・早期リハビリを実践することで、術前から有している合併症を悪化させることなくスムーズにリハビリテーションを施行出来るよう努めること

である。その使命を果たすためには、リハビリ病院との綿密かつ迅速な連携を図り、全身管理を適切に行える医師との連携をとりながらリハビリを進めることが重要である。また治療のどの時期においても患者家族に対して適切な病状説明が不可欠であることは言うまでもない。

## ま と め

1. 当院における大腿骨近位部骨折術後長期入院例について調査検討した。
2. 長期入院例は114/311例（37%）であり、その要因は、①自宅退院まで当院でリハビリを完遂、②施設入所・病院転院の待機、③術後合併症の治療であった。
3. 急性期病院の使命を果たすためには、リハビリ病院との綿密かつ迅速な連携、全身管理を適切に行える医師との連携、患者家族に対して適切な病状説明が重要かつ不可欠である。

## 文 献

- 1) Dorotka R et al. : The influence of immediate surgical treatment of proximal femoral fractures on mortality and quality of life. Operation within six hours of the fracture versus later than six hours. *J Bone Joint Surg Br.* 2003 ; 85 ( 8 ) : 1107-1113.
- 2) 日本整形外科学会診療ガイドライン委員会他（編）：大腿骨頸部/転子部骨折の疫学。大腿骨頸部/転子部骨折診療ガイドライン 2005 ; 19-26.
- 3) Siegmeth AW et al. : Delay to surgery prolongs hospital stay in patients with fractures of the proximal femur. *J Bone Joint Surg Br.* 2005 ; 87 ( 8 ) : 1123-1126.